
従姉妹と一緒に

ふじばん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

従姉妹と一緒に

【Zコード】

Z8213C

【作者名】

ふじぱん

【あらすじ】

とりあえず短編を書きたくなったのでこんな季節ハズレの10月にこんなホラーみたいなのを書いてしました。ホラーは処女作です。怖くないぞ、ボケが！などと言わずに読んでいただけます。もしよかつたら感想をお待ちしておりますm(——)m

私の従姉妹の親は葬儀会社に勤務しており、葬儀場の階下に自宅を構えていました。

それはもう一〇年も前の話。

今従姉妹一家は同市内のマンションで生活しています。

私は休日を利用し従姉妹の家に遊びに行つたところからの話は始まります。

私は今読んでる漫画から田舎を離して、めんべいへんてつ従姉妹の話を

「田舎が住んでいた家あるじやん？」

そこへふと従姉妹が言いました。

私は今読んでる漫画から田舎を離して、めんべいへんてつ従姉妹の話を

聞きます。

漫畫の続きが気になつてゐるのですが…。

とつあえず相槌をうつておきます。

「うん」

「今や、廃墟になつてこの辺じゃ知る人ぞ知る心霊スポットになつてるんよ」

そう言われて、私は昔の従姉妹の家を思い出します。

伯父さんと伯母さんがいて、小さかつた頃の従姉妹と妹がいて、よく学校の長期休みのたびに母親や兄と遊びに行つていました。

葬儀場と自宅はそれぞれ入口が別れていて、階下にある自宅の玄関に行くには階段を下りて玄関に行かなければならぬのです。

玄関の扉を開けると、すぐキッチンがあり、伯母の作る料理の味を思い出します。

母と姉妹のはずなのにまったく違つ味付けで、子供心に印象が残つていいるのです。

それから右手に進むと上に上がる階段があります。

当時、私は伯父の仕事内容まで知らず、その階段の上は伯父の仕事場というイメージしか持つていませんでした。

勝手に「ソック」と上がるとして伯母にきつづけられた記憶がいまだにあります。

少し奥にすすむと、お風呂とトイレが共同になつている一室があり

ます。

私は正直、この家のトイレも風呂も好きではありませんでした。

誰かが風呂に入った後用をたす時、床が濡れているため、滑りやすく、人の垢なんか汚れなんか知りませんが地面がヌルヌルしていて正直、好きではありません。

また、お風呂も身体を洗う為の行為と自覚しているのですが、目の前に便座があるという違和感がどうもたまりませんでした。

さらにも奥に進むと狭い廊下になつており、廊下の中間部左に部屋があります。

その部屋は伯父伯母の漫画倉庫でした。

子供のころの私には難しい漫画ばかりだったので記憶が少ないですが、キャプテン翼とか、ガラスの仮面などがあつてその部屋で読み耽っていた記憶が少々あります。

廊下に戻り、突き当たりまで行くと居間ににつきます。

そこで夕ご飯や、テレビゲームやレンタルビデオを見たという思い出があります。

テレビゲームとはいってもスーパーファミコンの時代で、マリオカラーをやりまくったという記憶ばかり残っています。

従姉妹は持ち主だけあってやたら強かった…。

手加減くらいいしてほしいものです。

そういう奥がありまして、そこは寝室です。

遊び疲れていつもそこで寝ました。

などと色々思い出のある家の家が今では廃墟になつてゐるといへ

「わうなんだ……」

「ね、ね、見に行かない？」

別に今は昼間ですから問題ないでしょ？

それに私は正直靈感なんてないと自負しています。

なんとなく懐かしさで軽く了承してしまいました。

徒歩10分位でしょうか。

私たちは目的地に到着しました。

昔下りていた階段をみると階段を挟む壁に薦が生い茂り、雰囲気は満天です。

「じゃあ、行こつか

従姉妹の言葉に私は頷き、階段を下りていきました。

玄関につきました。

従姉妹は扉を開けます。

なんで鍵がかかってないのでしょう?

仮にも数年前まで人が住んでおり、さらにいうならまだ葬儀会社が所有しているはずの建物です。

いくら無人とはいえ、無用心ではないでしょうか?

などと思つていたら従姉妹はズンズン中に入つていきました。

「うわ…」

玄関、キツチン見渡すとタバコの吸い殻や空き缶などが散乱しています。

さすが知る人ぞ知る心霊スポット。

出入りの激しさを物語っています。

というか普通に不法侵入ですから!

……私達も人のこといえませんね。

従姉妹が葬儀場に繋がる昇り階段を見つめています。

「妹がわ、しおみたこひづやつて階段の上をよべ見上げていたん
だ」

「うそ？」

「なんかずつと二三回してたんだよな。たまに手を振つたりして
だ」

「え？」

「誰もいないのになんで手を降つてのつて聞いたんよ」

「やじたひへ」

「あやいの姉のやことむじやん……だつしれ」

「……今、即興で作ったわざこみこよく出来てるね

「いや、実話。まだうち小さかったから幽霊とかそういうのピンとこなくてさ。ただ不思議だつたけど、今思えばこの上葬儀場だから有り得ない話じゃないよね」

「怒るよ？」

「『めん、『めん。』

従姉妹はそういってお風呂兼トイレを見に行つた。

あれ？

あそここの洗面台、鏡があつたよね。

なんで鏡だけないんだ？

なんとなく嫌な予感がしたので、私は事情を知つているかも知れない従姉妹にはあえて聞かないことにした。

いや、だつて怖いし……。

明らかに訳ありだとこいつとくらべ察しつくから……。

従姉妹は相変わらずスタスタと奥の旧居間に進んでいった。

私もそれに続いた。

居間もあいかわらず「ゴミが散乱としていた。

地元の若者の仕業だらう。

涼を求めてきたのはわかるけどだからといって「ゴミを散らかしていくのは感心しないな…、とか思っていると従姉妹が何かを拾つた。

「何？」

「ビデオテープ…だね」

なんのラベルも張つていらないビデオテープだった。

「これ、帰つて見てみよつよ」

「…え？」

「呪いのビデオかもよ？貞子がズル…ズル…つてさ」

「いや。有り得ないから」

それは映画の話。

現実にあんなビデオがあつたら日本中普通にパニックになつてゐるから。

「まあ、やつたけど。でも実際これ、なんのビデオだらうね？」

「あんたんちが引越しの時に忘れていたビデオじゃないの？」「いや、金曜ロードショーとかがはいつてゐんぢゃない？昔の」

「やつかもね。まあ、とつあえず帰らつか？」

私は同意し、その家から逃げるよつて黙つていつた。

従姉妹のマンションに着き、私たちは一息ついた。

「このビデオ何みよつか？」

「持つて帰つて來てたの？」

「いいじやん。どうせ私の家のビデオだし」

従姉妹はそういうてビデオをテッキにいた。

ザ――――

と砂嵐が流れれる。

合間合間に、ぶつぶつと画像が現れるが、その画像がなんなのか切り替わりが激しくてわからなかつた。

「古いビデオみたいね」

「そだね。何も残つてなさそう」

従姉妹は停止のボタンを押そつとテッキに近づいていった。

途端

画面がクリアになつた。

「え？」

二人組の女が玄関から入つて來た。

やがてカメラアングルは一人組の背後から撮り始めた。

そして片方の女がビデオテープを拾う。

そして、家を出でいった。

カメラは、その二人を追つよつて着いてくる。

見慣れた道、見慣れたマンション。

その見慣れたマンションに入つていく女達。

カメラはそれに着いていく。

やがて彼女たちは自宅に入り、談笑した。

そして先程のビデオテープをテッキにいれている。

私たちは後ろを振り返つた。

END

(後書き)

まあ、ぶつちやげますと私のイトコの昔の家のまんまです。

実際、廃墟になつてゐるそつです。

心靈スボットにもなつてゐるそつです。

イトコたちが興味本位でこの家に入つて行つたのも実話です。

ビートオを拾つのも実話です。

ビートオの中身は……

若きいじるの伯父の博多山傘の勇姿でした。

現実はそんなもんです。

ふふふ（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8213c/>

従姉妹と一緒

2010年10月13日02時51分発行